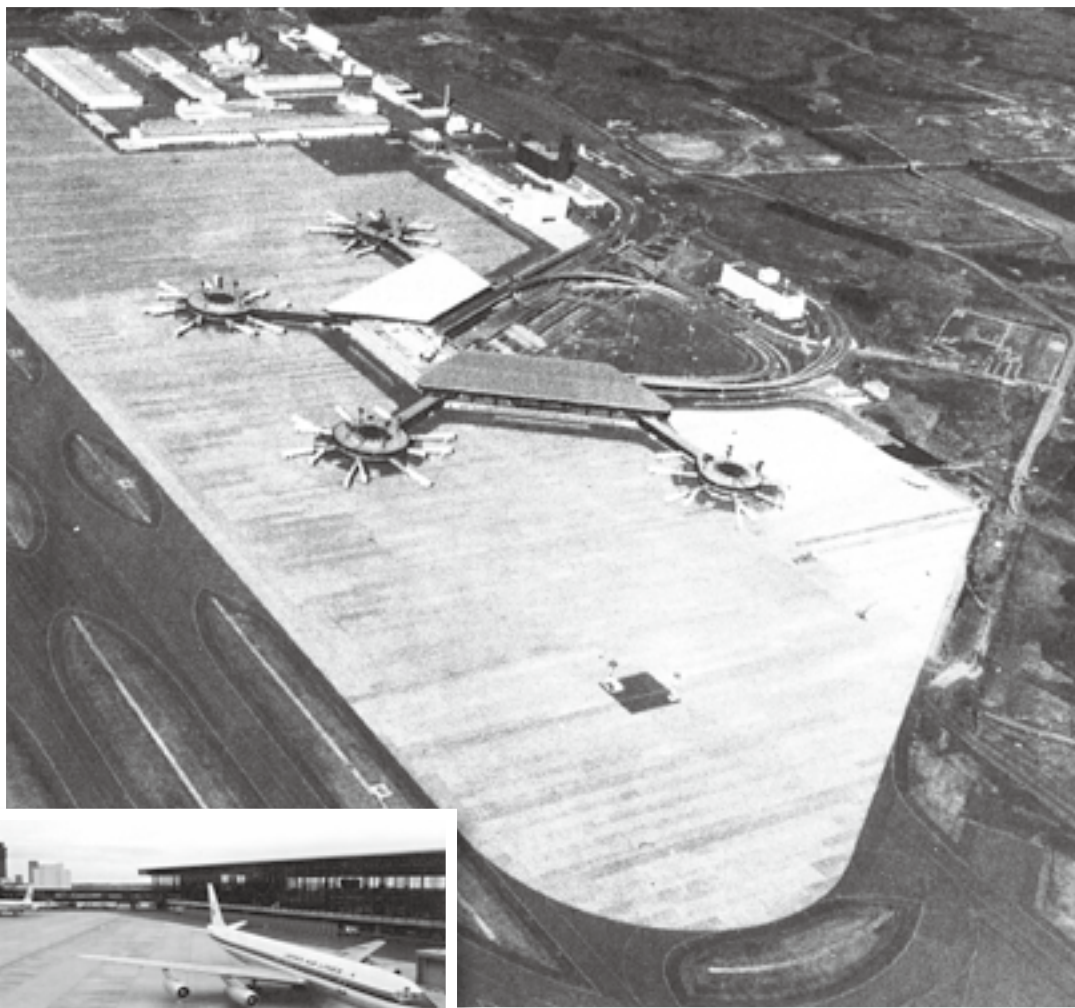


国際都市NARITAの幕開け



開港を待つ空港ターミナルビル



フランクフルトから到着した旅客便一番機

日本の空の表玄関成田空港は昭和53年5月20日、いよいよ開港を迎えました。市では国際文化都市にふさわしいまちづくりを目指して、国際交流や文化交流を積極的に推し進めました。

警戒態勢の中いよいよ開港

昭和47、48年の空港施設第一期工事によって主要施設がほぼ完成すると、航空機の騒音による周辺住民への影響という問題がクローズアップされてきました。一方市では、騒音対策を行政の最優先事項に挙げ、民家防音工事の助成などを行う対策を進める傍ら、昭和47年には空港対策室を発足、空港に関する問題を早急に処理することに努めました。

いよいよ、開港が昭和53年3月30日に決まり、空港内では、搭乗案内の予行演習が行われ、慌ただしさと緊張感に包まれていました。しかし直前の3月26日の午後、空港の中枢施設である管制塔が破壊される事件が起こり、開港は延期となってしまいました。

その後、破壊された施設の復旧も整い、5月20日、1万人を超える機動隊・警察官に見守られる警戒態勢の中で開港の日を迎えたのです。

運航開始日となった翌21日午前

8時3分、アメリカ・ロサンゼルスからの貨物便一番機が反対派の燃やす古タイヤの黒煙の中をかいくぐるように4、000メートル滑走路南側に着陸。この日を心待ちにしていた関係者からは、拍手と歓声が沸き起こりました。そして、正午過ぎには旅客便一番機がフランクフルトより到着。

22日には、成田離陸一番機として大韓航空の貨物便がソウルに、旅客便一番機として日航機がグアムに向けて旅立ちました。

23日からは国際線全147便が運航されました。ターミナルロビーには色とりどりのバッグやスーツケースを持った各国の乗降客が行き交い、世界と結ぶ成田空港が誕生したのです。

ニュータウン秋祭りが開催

空港で働く人や市外から転入する人などが昭和46年から入居し始めたニュータウン。昭和54年に成田ニュータウン自治会連合会が結成されると、翌55年に「第1回ニュータウン秋祭り」を開催。子

Narita Chronicle

「昭和50～59年の出来事」

- 昭和50年 3月 国際文化会館が完成
- 昭和53年 5月 新東京国際空港(成田空港)が開港
- 昭和54年 4月 国鉄(現JR)成田駅橋上駅舎が完成
- 昭和57年 4月 外国人講師制度が開始
- 昭和58年 6月 中台運動公園陸上競技場がオープン
- 昭和59年 6月 市体育館がオープン
- 10月 市立図書館がオープン



世界中の注目を集めた開港式



日本航空第1便に搭乗する人たち



県下一の体育館を建設



外国人講師第1号のスタブ先生



ホームビジット制度で国際交流

未来の成田がどん帳に

日本の空の表玄関にふさわしい市民文化の殿堂となるべく、空港開港に先駆け昭和50年3月に完成した国際文化会館。

成田山新勝寺や成田の町並み、空港などが描かれている大ホールの第2どん帳のデザインは、公募で選ばれました。当時、成田小学校6年生だった川畑みどりさんの絵に、市内出身の画家篠崎輝夫さんが筆を加えて仕上げたものです。



小学生の絵を基に作られたどん帳

外国語教育と国際文化交流

国際文化都市を目指す市では、子どもたちに国際感覚を身に付けてもらおうと、昭和57年4月から外国人講師による英語の授業が実施されました。また、日本の伝統文化を知ってもらおうと成田ユネスコ協会による国際文化交流、外国人観光客に市内の家庭を訪問して日本の日常生活に触れてもらう

子どもたちに国際感覚を身に付けてもらおうと、昭和57年4月から外国人講師による英語の授業が実施されました。また、日本の伝統文化を知ってもらおうと成田ユネスコ協会による国際文化交流、外国人観光客に市内の家庭を訪問して日本の日常生活に触れてもらう

ホームビジット制度も始まりました。

スポーツ・文化交流の拠点に

市制施行30周年を記念して、昭和58年6月に陸上競技場(メインスタンド)、昭和59年3月に体育館、同年10月に図書館が開設されました。

当時、県内に全天候型の陸上競技場は県陸上競技場しかなく、市町村での建設は初めてでした。体育館の2、350平方メートルのアリーナも当時としては県下一を誇るなど、県内随一のスポーツ施設が完成したのです。また図書館は、国際文化都市にふさわしく、蔵書には空港関係の本や外国語の原書が豊富に取りそろえられました。